

---

# DEVIL SURVIVOR2-GRAND CROSS-

亜兎羅須

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

DEVIL SURVIVOR 2 - GRAND CROSS -

### 【Nコード】

N3275W

### 【作者名】

亜兎羅須

### 【あらすじ】

『足掻け、最後まで』 大学受験を控えた高校3年の秋。模擬試験を終えた帰り道で、ごく普通の少年『冬川威月』の携帯に、1通のメールが着信する。送り主は、死に顔サイト『ニカイア』。友人が死ぬ時の光景が見られるというそのサイトから、一緒にいた志島大地や新田維緒にも同じメールが届き、何とそこには、それぞれが死ぬ時の動画がアップされていた。それを皮切りに起きる、地下鉄の電車事故や、破壊された街。そして突如、各地に現れ始める異形の存在 『悪魔』。果たして3人は、この残酷な現実を受け

入れ、生き残る事が出来るのか。『友を選び、悪魔と契れ。神へと挑む7日間』。これはアトラス原作のSRPG『デビルサバイバー2』に作者独自の解釈を加えた二次創作小説です。ネタバレを多分に含みますので、その点を踏まえた上でお読み下さい。

PROLOGUE・HERO・（前書き）

『愛は死よりも、死の恐怖よりも強い。愛、ただこれによってのみ人生は与えられ、進歩をつづけるのだ』

## PROLOGUE - HERO -

異様な光景だった。

入り口の上部に『手術室』というプレートがかかったその部屋には、およそ3人の人間しかいなかった。

しかし、それは『意識のある人間』というくくりで考えた場合の話で、床に倒れている者、壁に背を預けて口を半開きしている者なども含めれば、その数はおよそ数十人にも及ぶ。

要するに、先に述べた3人以外は皆、どういう訳か、気を失っているのだ。

1人は、手術台の上に力なく横たわり、今にもこと切れてしまいそうなほど、弱々しい呼吸を繰り返している青髪の女性。

1人は、そんな女性のすぐ傍で、クシャクシャの黒髪に、服を脱いだ上半身を包帯でぐるぐる巻きにして佇んでいる、まだ10歳前後と思われる少年。

そして最後の1人は、なんと髪が混じりっ気のない白色の男で、そんな2人の様子を、少し離れた場所にある壁に背を預けながら、無表情な顔で見つめていた。

横たわる女性の隣には心電図が設置されており、そこから発せられる、無機質で 且つ儂げな音が、時折、室内の沈黙を破っている。

そんな中、手術台に乗せられた青髪の女性が、傍にいる黒髪の少年の頭を優しく撫でながら、ゆっくりと口を開いた。

「よかった……」

その台詞を聞いた瞬間、途端に、少年の心は悲しみと後悔とで張り裂けそうになった。

それでも何も言わず、ただ脇に下げた両手を固く握り締めながら黙って佇んでいるのは、ほんの少しでも口を開けば、その瞬間に自らの心の枷が砕け、大声で泣き喚いてしまうであろう事が容易に想像できたからだ。

幸か不幸か、その黒髪の少年は、11歳という年齢でありながら既に、自らの心を『ある程度』律する方法を会得していた。

「よかった…… だけでも…… 生き残れて……」

「……………っ！」

それでも、自らの心を『完全に』制御する事など そんな事は、年齢に関わらず、どんな人間であろうと出来る筈がない。

ましてやそれが、まだ幼い少年で、目の前で実の母親が死にかけているとなれば尚の事だ。

事実、その両目からは溢れんばかりの涙が流れ、その両手を強く握り締めながら、肩を小さく震わせているなど 黒髪の少年は、自らの心の内から溢れ出る悲しみを抑えきれずにいた。

壁に背を預けている白髪の男は、相変わらず感情の伺えない表情で、無言のまま、その光景を見つめている。

「私の子……私の……世界で1番……大切な……」

唐突に、母親の言葉がそこで途切れ、代わりに何度も苦しげに、その口から大きく咳を漏らす。それに伴い、彼女の口から、桜が舞うように深紅の液体が飛沫を上げた。

もう長くない。

そんな事は、本人は勿論、その光景を、ただ静かに涙を流しながら見ている黒髪の少年にも分かっていた。

瀕死の母親は、手術台からそっと手を伸ばし、愛する息子の頭の後ろに回すと、そのまま優しく、自らの元へと抱き寄せた。

そのまま、彼の耳元で小さく呟く。

「……今まで……ありがとう……」

そして、

「……………」

長い電子音が鳴り響いた。

黒髪の少年の、この世に2人しかいない家族の内の、1人の命の灯が消えた瞬間だった。

数秒の沈黙が流れる。

母親の表情は、とてもこの世から去ったばかりとは思えないほど安らかで穏やかなものだった。

本当に　ただ、眠っているだけのように見えた。

しかしそれでも　やはり　彼女は死んでしまったのだ。

その現実を受けてもなお、少年はただ、阿呆のように佇んでいた。

彼の外見で目立った変化は、その両目から溢れ出る涙の量が、更に多くなつた事のみ。

どれだけの時間が経つただろう。

やがて　ここで初めて、今まで壁に背を預けているだけで、微動だにしなかつた白髪の男が動いた。

黙つて母親の亡骸を見つめる黒髪の少年の背後にゆっくりと近づき、彼の両肩にそつと手を乗せる。

「……済まない。やはり、彼女だけは……助けてあげられなかった……」

その声には万感の悲しみと懺悔の念が込められており、まともな人間ならば、その白髪の男の言葉が、彼の純粋な本心からのものであると分かるだろう。



事実、黒髪の少年は、白髪の男の謝罪の台詞を、言葉通りの意味として受け取っていた。だからこそ彼は、その両目から流れ出る涙を拭おうともせず、その場で振り向き、白髪の男の顔をじっと見つめ、気にしないでもいいとばかりに小さく首を振ったのだ。

白髪の男は一瞬、そんな黒髪の少年の顔を驚いたように見つめた後、やがてはフツと表情を緩め、その頭を優しく撫でる。

黒髪の少年は、不思議なものでも見るような目で白髪の男の顔を見上げた。

やがて白髪の男は、黒髪の少年と同じ目線になるよう膝を付き、ゆっくりと口を開く。

「いいかい……これから君に、私の力の一部を預ける……。これは君を生き長らえさせる為でもあるし、いずれ人類全体に降り懸かるであろう『試練』において、やはり君を生き延びさせる為でもあるが……」

言いながら、白髪の男は黒髪の少年の両手を目の前に引き寄せ、それを、同じく自らの両手で優しく包み込んだ。

「……『これ』によって、今から君には記憶障害が起こり、私に関する記憶は一旦、全て失われるだろう……。だが、思い出が消えても、今回起きた『事実』が消える訳じゃない。残念ながら、今、多くを語る事は出来ないが……。もし君が望むならば、私の力と、彼女『歌姫』であり、君の母親である彼女の力とが、今言った『試練』の際に、きつと役に立つ筈だ」

次の瞬間、白髪の男の手から、何か不思議なものが自分の手を伝

い、やがて体内に流れ込んでくるのを、黒髪の少年は確かに感じた。

同時に、抗いがたい程に強烈な眠気に襲われ、たまらず、その場で両膝をついてしまう。

「もし、何か迷う事があったら、彼女から授かった、その左肩の刺青すずみに触れてみるといい……。きっと、正しい方向へと導いてくれる筈だ」

視界がぼやけ、急速に薄れゆく意識の中で、白髪の男の声だけが、黒髪の少年の耳の中で反響する。

「また会おう……『輝く者』よ」

そして、7年の月日が流れた。

PROLOGUE - ABEL - (前書き)

『この世界における大事件の歴史は犯罪史のほかのなにものでもな  
い』

PROLOGUE - ABEL -

10月上旬の、午後11時。

芝公園、東京タワー下。

いつもなら、例えどんな時間であろうとも、ある程度の数の人々によって賑わいを見せている筈のその場所には、しかし とういう訳か 現在は、たった1人の人間の姿しか見られなかった。

1人の 白髪の男の姿しか。

「……………」

その男は、明らかに異様だった。

外見もさる事ながら、その存在そのものが、どこか人間離れた  
まるで、何かの間違いによってこの世界に存在するのを許され  
てしまったかのような、そんな雰囲気、男にはあった。全体的に  
体の線が細く、傍目からは男か女かを判断するのさえ難しい程の、  
中性的な顔立ち。赤と黒の縞模様しまで彩られた衣服に、下には黒いパ  
ンツを履いている。見る人が見れば、今にも貧血で倒れてしまうの  
ではないのか、と思わず心配してしまうぐらいに肌の色が薄く、そ  
れが癖の強そうな白髪と相まって、更に病的な印象を男に与えてい  
た。

「……………」

と、

相変わらず無言で、特に何をやる訳でもなく　ただ1人、白髪の男は、目を閉じながら、東京タワー下に佇んでいる。

その様はまるで、神に祈っているようにも、『何か』を待っているかのようにも見えた。

否　ように、ではなく、事実、白髪の男は待っていた。

そして、程なくして『それ』は、唐突に、彼の背後の空間に現れた。

余りにも突然に、余りにも唐突に現れたので、地面から湧いて出たのではと思う程だった。

『それ』に気付いたのか、目を閉じたまま　ピクツと、白髪の男は、片方の眉だけを僅かに動かす。

『それ』の正体は、1人の男だった　が、その男にしてもまた、未だ目を閉じたままの白髪の男と同じく、明らかに、人間離れた雰囲気を感じていた。

事実、こと異常さにおいては、白髪の男よりも、後から現れたこの男の方が、明らかに上だった。

身長は白髪の男と同じく、1メートルの半ばよりやや高いぐらいで、細身で、手足が長い体格というのも、白髪の男と同じだった。しかし、傍から見てとれる手の甲の骨や首元の鎖骨の浮き上がり具合から、その男が実は、余分な肉を全て削ぎ落とした、非常に引き

締まった体をしている事が分かる。男にしてはやや長めの、片目が隠れるぐらいに伸ばした青い髪を後ろで縛ってポニーテールにしており、白髪の男と同じく黒いパンツに、上半身には黒いTシャツ、その上に、白と黒のゼブラ柄のタクティカルベストを着ている。全身の至るところにシルバーのアクセサリを身につけ、東京タワー下に微かに風がそよいただけで、それらがジャラジャラと耳障りな音を鳴らしていた。耳には白いヘッドホンをつけているが、そこから伸びる黒い針金のような部品は、何故か猫耳のような形をしており、右腕に彫られた赤い薔薇のような紋様の刺青いれずみや、左目に入った縦長の傷などが、その男の異様さを更に際立たせていた。

「悪い、遅くなった」

と、青髪の男が言う。

その言葉を聞いて、ようやく、白髪の男はスッと目を開け　しかし、顔は未だ青髪の男の方に向けないまま、

「……構わないよ。昔から、待つには慣れているからね」

と言った。

「そうかい、そいつは重畳」

言いつつ　やがて、青髪の男は、およそ1メートルにも満たない距離にまで白髪の男へと近付いていくと、やがて、ピタリと足を止めた。

「それで……首尾は？」

白髪の男が言う。

それに対して、青髪の男は小さくため息をついた。

「相変わらず無粋な奴だな、お前は。久しぶりに会ったんだから、少しは軽いジョークでも言ってみようと思わねえのか？」

普通ならば、それこそ軽いジョークとして受け流すべきその言葉を、しかし白髪の男は、

「ん……？　そうか、それはすまない。些か配慮が足らなかった。これからは気をつけるよ」

と、至って真面目な様子で受け答えをする。

「しかし果たして、君を楽しませる　その『じょーク』とやらを、僕に言うことが出来るだろうか？　或いは、君のその奇っ怪な形をした耳飾りに対して、何かしらの意見でも述べればいいのかい？」

「……………」

そんな白髪の男の台詞に対して、しばしの間沈黙を保った後、やがて青髪の男は、その頭に軽くチョップを見舞わせる。

「……………？　何だい？」

途端に、白髪の男は、きょとんした表情で、小さく首を傾げた。

「……………いいか」

「どうやら、先の白髪の男の言葉が何らかの逆鱗さかきりんに触れたらしく、彼の顔を、青髪の男は至って真面目な視線で睨みつけると、次のように言った。

「……いいか、よく聞け。仮にも今後、俺と手を組んで行動するつもりなら、俺のこの猫耳ヘッドホンに対して、『奇っ怪』とか『へんてこ』とか、2度と言うな」

「『へんてこ』とは言った覚えはないが……分かった。君がそう言うならば、これからは善処しよう。軽率な発言をしてすまなかった」  
「それでいい」

短く応じて、ハアツ、ともう1度だけ小さくため息をつく、再び、青髪の男は口を開く。

「あー……、まあ、いい。お前と笑える話をするのは諦めたよ。もう、とつとと本題に入ろうぜ。えーと、確か、何て言ったっけ？  
これから、俺達が戦うべき相手の名前は  
「  
と、

そこまで話して　不意に、青髪の男は口を止めた。

原因は、彼と白髪の男の2人の周囲を取り巻く状況に生じた、ある『変化』にあった。

まるで獣の唸り声のような　常人には決して聞き取れない程に小さいその音を、しかし青髪の男は敏感に聞き取ったのだ。



少し遅れて、白髪の男もまたその音に気付く。

「更には、その音を発している『何か』の存在にも。

「……………？ 妙だね……………？ まだ、私が施した『人払い』の術式が解ける時間ではない筈だが……………？」

白髪の男が言う。

それに応じる形で、続けて青髪の男が、

「まさか、お前ほどの奴が展開させた術式が、そう簡単に破られる訳もないいな。……………となると、答えは1つだ」

直後に、更なる変化が起きた。

ドンツツ！！と、

2人が立っている場所が突然爆発し、その部分の地面がまとめて抉<sup>えく</sup>られ、消失したのだ。

が、それが起きるよりも一瞬早く、2人は飛び上がっていた。

特に慌てた様子もなく、むしろ気軽とも言える動作でその身を宙に浮かばせた2人の体は、爆発が起きた時には、なんと地上から10メートル近くもの高さにあった。

勿論、ただの人間に　と言うよりは、例えオリンピックで金メダルを取れる程のスプリンターであろうと、一瞬の内に、これだけの高さに飛び上がれる訳がない。

故に、その常識外れの行動が 身に纏たがっている雰囲気たがに違わず  
2人が決して『普通』ではないという事を、如実に表していた。

「……随分なご挨拶だな」

呟き やがては、まるで猫のように音も立てずに、青髪の男は  
静かに着地する。

一方の白髪の男はと言うと どんなトリックを使っているのか  
なんと、相変わらず地上から10メートル近い高さたがにその身を  
置いたまま、フワフワと宙に浮かんでいるではないか。

これまた、異常。

が しかし、いつの間にか、2人の周囲から湧き出てきている、  
ある者達の存在に比べれば、そちらの方が、幾らかまともに見えた  
かもしれない。

先程、2人が耳にした唸り声の正体であり、たった今爆発を起こ  
した張本人が、いつの間にかその姿を表していた。

いや、より厳密に言うならば、『張本人』という言い方は正確で  
はない。

何故なら、それらは人間ではないからだ。

「『悪魔』……」

ポツリと、宙に浮かんでいる白髪の男が呟く。

本来ならば、人の世に出てきてはならぬ　しかし時として、その禁を破り、この世に現れる異形。

人はそれを『悪魔』と呼ぶ。

現在、2人の周囲を取り囲んでいる悪魔　獅子の体に鷲の羽を持つ悪魔や、蠍アラクネと人間を足して2で割ったような悪魔など、常識から外れた姿を持つ者ばかりだ　の数は、1体や2体ではなかった。

10体が、20体が……或いはそれ以上。

とにかく、数える事さえ億劫おっくうになる程の悪魔の群れが、2人の周りで蠢めいいている。

「おいおい、まさか、もう始まつてるのか？」

パチパチと目を瞬しせながら、青髪の男が言う。

「いや……」

それに対して、白髪の男が答えた。

「恐らくこれは……『ポラリス』の仕業だろう。どうやら、人類を滅ぼすよりも先に、ここで私達の力量を見極める算段らしいね」

「ふーん」

至極どうでもよさそうな口調で、適当に相槌を打つ青髪の男。

彼にしても、宙に浮いている白髪の男にしても 無数の悪魔に  
囲まれているという状況にも関わらず、どちらもが、まるで緊張し  
た様子を見せていなかった。

「んー……」

青髪の男は、一旦、周りの悪魔達にグルッと目を向けた後、次に  
は、その視線を宙にいる白髪の男に向けて、

「……ここは俺にやらせてくれ。お前の手を借りて『向こう側』か  
ら来たばかりで、若干ボケてる体を目覚めさせるには丁度いい」  
と言っ。

「大丈夫かい？」

「……おいおい、俺を誰だと思ってるんだ？ 『向こう側』で『ベ  
ルの王位争い』を勝ち抜いてきた俺にとって、こんな連中は、準備  
運動にもなりはしねえよ」

特に驕おごっている訳でもなく、心の底からそう思っている様子の青  
髪の男に対し、白髪の男は1度だけ頷くと、次のように応じた。

「そうか……。君がそう言うなら構わないけど じゃあ、一つだ  
け気をつけてくれ。出来るだけ、周りの建築物などは無闇に破壊し  
ないで欲しい。……まだ本格的に『始まる』よりも前に、人々にい  
らぬ混乱を与えたくはないからね」

「これだけの数の悪魔が相手だっというのに、中々ハードな注文を  
してくれるじゃねえかよ。お前って、実はサドなのか？」

「さど？」と、純粹に、その言葉に対して、白髪の男が疑問に思っているように首を傾げているのを尻目に、早速、青髪の男は悪魔達へと視線を戻し、連中と戦う為の準備を開始する。

刹那、ゴオツ！！と、目に見えない大量のエネルギーが、青髪の男の全身から溢れ出た。

エネルギーの正体は、『魔力』。

通常は、人間に操る事など出来はしないが、極めて特殊な才能を持って生まれてきた者や、ある一定の手順を踏んだ者にも扱える事が出来る、人知を越えた『力』の源泉。

それを、青髪の男は自在に操っていた。

現在、青髪の男の体は、何やら青白い光に包まれ、まるで、彼の周りだけが昼になったかのような状況になっていたが、通常、魔力とは目に見えないものであり、よほど高密度に展開されたものでもない限り、こうした現象が起こる事は、殆どない。

この事からも、やはり青髪の男はただ者ではなく、現在、彼がどれだけの魔力をその身から発散させているのかが分かる。

周囲にいる悪魔達も、それを本能的に感じ取ったのだろう。彼等は皆、明らかに青髪の男に怯えた様子で、一步、後ろへと下がっていた。

「にしても、えーと、その……『ポラリス』、だっけ？ ソイツは中々に気が利いてるな。わざわざ、こっちに肩慣らしの機会を与え

てくれるなんて」

ま、この程度で、本当に肩慣らしになったら、の話だけどなと続けながら、青髪の男は、コキコキとその場で首を鳴らす。

次に彼は、途端に何かを思い出したかのような表情になり、再び白髪の男の方に顔を向けると、おもむろに口を開いた。

「ああ、そうだ。さっきも聞こうとしたけど　最後に、1つだけ教えてくれ。『こつち側』で俺が倒すべき相手の名前は、何て言うんだっけ？」

途端に　先程までは、薄い笑みを浮かべていた白髪の男の顔から、フツと表情が消えた。

怒っているのか、笑っているのか、或いはそのどちらでもないのか　この時の白髪の男の表情からは、何の感情も読み取る事が出来ない。

「峰津院……」

ややあって、白髪の男が言う。

「ほつしん やまと峰津院大和だ」

表情からはともかく、その、感情を無理矢理に押し殺したかのよ  
うな口調からも、今、白髪の男が言った『峰津院大和』という名前  
が、彼にとって何かしら特別な意味を持っているらしい事は明らか  
だったが、しかし、青髪の男の方は、特にそういう事はなさそう  
な様子で、

「OK、了解した」

と、実に気軽に応じる。

「そんじゃあ……行けよ。お前にはまだ、やるべき事が残ってるん  
だろ？」

それに対して白髪の男は、再び口元に薄い笑みを浮かべると、

「そうだね……。じゃあ、お言葉に甘えて、私はここで失礼させて  
もらつとするよ」

と応じた。

「私は、これから名古屋へ向かう。……何か用があったら、君もそ  
こまで来てくれ」

次には、先程までずっと同じ位置で静止していた体を、更に高く  
上昇させる白髪の男。

「それじゃあ……また会おう、『アベル』」

それだけ言うと、何の前触れもまなく、白髪の男の姿がその場で

かき消えた。

まるで、これまでの彼の存在や言動の全てが、まやかしであったかのように、

しかし、先程まで、彼は確かにそこに存在していたのだ。

「……だけれが、わざわざ野郎に会う為に、名古屋くんだりまで足を運んだりするかよ」

呟き 次にアベルは、その身に尋常ではない量の魔力を纏いながら、ジャリ……と、一步、その場から足を前に進めた。

それに周囲の悪魔達が敏感に反応し、本来、ただの人間の前では見せる筈のない 僅かに怯えたような態度を見せると、近づいてきたアベルに対して、逆に距離を取ろうとする。

「あー、でも、スガヤキラーメンとか味噌カツとかコーチンとかだったら、1度でいいから食ってみたいかもな。……用事っつーか、暇があつたら、試しに行ってみるか」

やがて、

その言葉を合図にしたかのように アベルの身から発せられる、ただならぬ威圧感によってもたらされている不可視の拘束を解き、アベルの周囲にいる悪魔達が、一斉に動く。

刹那、無数の魔法と爪と牙とが、アベルに襲い掛かった。

それら1つ1つが、例外なく必殺の威力を持っていたが、しかし、



アベルは慌てない。

振り向けられた爪を避け、それをしてきた悪魔を吹き飛ばし、時には近くにいる悪魔を盾代わりにして、飛来してきた炎弾やら氷弾やらを防ぐ。

背後から大口を開いて突貫してきた獣型の悪魔に対しては、その口腔内に直接渾身の右ストレートを放ち、その頭部を粉々にしてやったりもした。

魔法の1つも使用していないにも関わらず　ここまでの挙動をアベルがするのに、ものの数秒もかかっていなかった。

(……おいおい、いくら何でも歯ごたえがなさ過ぎだろ。ポラリスって奴は、どんだけ俺を過小評価してるんだ?)

思い、アベルは、一瞬の内に悪魔達の包囲網を潜り抜けると、わずかに遅れて、その軌道上にいた悪魔達の首が、音もなく切断される。

しかし、彼は返り血の一滴も浴びないまま、再び距離を詰めてきた悪魔達の内の1体の攻撃をかわし、その首をへし折ると、次には、正面にいた悪魔の腹部に強烈な前蹴りを放った。

その悪魔の内臓やら血液やらが、突き出した足に付着するのを感じつつも、アベルは、振り向き様にいつの間にか背後に迫ってきた悪魔の顔面に肘打ちを食らわせ、先程蹴りを放った足を大きく振るう事で、そこに串刺しにされていた悪魔の肉体を、一際数が多そう敵の集団に叩きつける。

全てが、一瞬の内の出来事。

凄まじい強さに　そして、凄まじい速さ。

並の人間ならばとっくの昔に命を絶たれているであろう悪魔達の猛攻を、しかし、アベルは冷静に対処していく。

「ま、ベル・デルヤクー・フリーンの奴に比べたら、大抵の悪魔はこんなもんか……。少しは楽しませろよ、お前ら!!」

『向こう側』にて『ベルの王位争い』を勝ち抜いた、『万魔の王』<sup>ア・ベル</sup>が動く。

直後、大地を揺るがす程の轟音と、悪魔達を無に還さんとする暴力の嵐とが、東京タワー下を支配した。

Sunday 『冬川威月』 (前書き)

『理解は、あらゆる友情の果実を育成させる土壌であるに違いない』

## Sunday『冬川威月』

そんな風に、東京タワー下にて、人知れず人外の存在同士が密会を果たしてから、約12時間が経過した頃。

場所は、都内の某所にある高校にて行われている、模擬試験の会場。

出入口には、『3 A』というプレートがかかっている。

小気味よいチャイムの音が、校内に響き渡っていた。

それに伴い、試験の午前の部が終了した事によって、試験の緊張から解放された大勢の生徒達が、たまたま受験場所が同じになった友人などと、気軽に言葉を交わしている。

中には私服の人間の姿もちらほらと見受けられる。割合としては、全体の半分程といったところか。

そして、そんな私服組の生徒達の中に、一際目立つ外見をした少年がいた。

一見すると、その少年の服装はちゃんとした制服のように見える。

が、しかし、少年の衣服は雪を思わせるような純白で、周りにいる、薄紫色の衣服を着た制服組とは服の色もデザインも違うし、何よりも、襟首の部分のフードには、兎の耳を思わせる、ヒョロリと伸びた奇妙な形のオプションが施されていた。

より詳しい位置を指定するなら、教室の中心の後方にあたる席に、その少年はいた。

先程述べた奇妙な衣服に加え、青いパンツ、癖の強そうな黒髪は、所々が激しく自己主張でもしているかのよう、勝手気ままな方向へと撥ねている。どういう訳か、目の色は髪とは違って、サファイアのように美しい青色で、肌の色が薄く、非常に整った顔立ちをしている。その為、身につける服装如何いかんによっては、外見の性別が変わってしまいそうなその少年の事を、時折、周りにいる女生徒達が、気になるようにチラチラと視線を送っていた。

が、黒髪の少年は、それには全く気付かない様子で、試験が終わってからはしばらくしてしても たまたま、知り合いのいない教室に割り当てられたのか 周りにいる人間とは一言も言葉を交わさず、実に緩慢な動作で、机の上に置いた白いスポーツバッグに、筆記用具等を仕舞っていた。

その時、教室のドアがガラツと開き、1人の少年が入ってきた。

髪の茶色いその少年は、黒髪の少年の姿を認めると、その顔に人の良さそうな笑みを浮かべながら、黒髪の少年の方に近付いていく。

「お、、いたいた！ こっちの教室どうよ？ いや、俺んトコ、知り合いいなくてさ」

黒髪の少年も、茶髪の少年の存在に気付いたようだ。一旦、筆記用具を仕舞う手を止めて、若干眠そうにパチパチと何度か瞬きした後、ゆっくりと茶髪の少年の方へと顔を向ける。

「いや、しかし、ようやく終わったな、試験！ ……そんで、お前、ぶっちゃけどうよ？ 出来の方は」

「ん、まあ、ボチボチだよ」

黒髪の少年の返答を聞いて、再び、その顔に笑みを浮かべる茶髪の少年。

「いかな、そんなんじゃ。俺を見る！ 色んな意味で、完全に終わってるぞ！？」

「……………」

明るい表情でそんな事を言う茶髪の少年に対し、黒髪の少年は「それはどういう意味だ？」というニュアンスの視線を送ったが、結局、それを言葉にはしなかった。何となく、聞いてはいけないような気がしたからだ。

茶髪の少年が辺りに放つ雰囲気は、如何にも今の時代を生きる、あまり物事を深く考えない若者、という感じだった。茶色の髪を左右に分け、首にはお気に入りらしい黄色いマフラー、黒髪の少年とは違い、薄紫色の学生服の下には、黒いワイシャツを着ている。彼もまた、黒髪の少年と同じく午前の試験が終わったところらしく、その証拠に、背にはこれまた黄色いリュックサックを背負っていた。再び、教室のドアが開く音。

次に教室に入ってきたのは、試験官らしき中年の男性だった。

「志島さん、志島大地さん！ ……あ、いた！ 志島さん、

忘れ物ですよ？」

試験官らしき男性が言う。

「わ、やっべ！ はいはい、は〜いつ！ 俺で〜すっ！」

そのように元気よく返事した事からも、先程から黒髪の少年に話し掛けていた茶髪の少年が、試験官が探している『志島大地』なる人物である事が分かる。

試験官が片手に、自分にとって見覚えがある物を持っているのを確認した志島大地ことダイチは、首に巻いた黄色いマフラーをなびかせながら、慌てた様子で、教室の入り口へと向かっていく。

「あなた、試験は午前だけでしょう？ 探しましたよ。受験票と携帯電話、席に忘れて行ったから……」

「や〜すんません！ ありがとうございます〜」

言っているほど反省していない様子のダイチの声を聞きつつ、ようやく、筆記用具をバッグに詰め終える黒髪の少年。

後に残った荷物は、机の上にポツンと置かれた青い携帯電話のみである。

間もなくしてダイチの方も、受けとった受験票と携帯電話（どうしてそんな貴重品をコンボで忘れられるのか、黒髪の少年には疑問で仕方なかった）を手にしながら、黒髪の少年の方へと戻ってきた。

「あつぶね〜……、また担任にドヤされるところだったよ」

と、そこで急に、何か思い出したかのような表情になるダイチ。

「……あ、そうだ！ お前に見せたいモンがあるんだった！ どうよ、見る？」

「……いきなり何だよ？」

率直な感想を口にする黒髪の少年。

「ぬっふっふっふ。そんなに怪しむなって！ ちっと、ケータイ貸してみ？」

ダイチがそのように言うと、言うが速いか 彼は、机の上から黒髪の少年の携帯を奪い取ると、何やら、勝手に操作をし始めたではないか。

「……………」

一瞬、その首に巻かれている黄色いマフラーの両端を引っ張って、ダイチの首を絞めたい衝動に駆られた黒髪の少年ではあったが、そこはグツと堪え、ダイチが携帯の操作を終えるのを待つ事にする。

元より、見られて困るようなデータなど入ってはいない。1週間に1回は、姉に中身をチェックされているので、18歳という、異性に興味があつて当然の年齢であるにも関わらず、いやらしい画像の一枚さえ保存されていないのだ。

「赤外線ポチッ、と。……お、来た来た、はい」



言ってダイチは、黒髪の少年に携帯電話を返す。

受けとった携帯電話に黒髪の少年が目を通すと、そこには『Ni  
c a e a - a d e a d f a c e d e l i v e r y s i t e  
』と記された、何かしらのサイトのトップ画面が表示されていた。

「じゃ〜ん、すげーだろ？ この……えーと、『にかえあ』ってヤ  
ツ？ 最近密かに流行ってる、あの『死に顔サイト』らしいぜ〜」

自慢のペットでも披露するかなのような口調で、ダイチが言う。

「……？ 『死に顔サイト』？」

が、残念ながら黒髪の少年は、そのサイトの存在さえも知らない  
ようだった。

もつとも、先程ダイチも『密かに』と言っていたので、別にそれ  
でも何ら不思議ではないが（ちなみに、先程ダイチが『ニカイア』  
を『にかえあ』と言い間違えた事について、黒髪の少年は、いちい  
ちそれを指摘するのも何となく癪くやしだったので、ここは話を前に進め  
るのを優先させる事にした）。

「あら、知んないの？ いや、何でもさ、コレに登録すると、自分  
の友達の『死ぬ時の光景』が見れるっていうらしいんだよ！」

「へえ？」

とりあえず、ここではそのように返しておく黒髪の少年。

「ホラ、お前も知ってるだろ？ 先週事故って死んじゃった、2コ

上の先輩の話。……まあ、名前は忘れちゃったけどさ。とにかく、あの人と一緒にコレやった友達が、マジで、その先輩が事故って死んでる時の顔、見てたらしいぜ!? まあ、それだと『死に顔』って言うより、どっちかと言うと『死に様』サイトって感じだけどな、はは！」

後半辺りになると、ダイチが明らかに楽しんでらしい様子が、黒髪の少年にはハッキリと分かった。

同時に、笑い事かよと心の中で突っ込んだりもしたが、それもまた、口に出したりはしなかった。……よくよく考えれば、人間がいつ死ぬかを予想し、その光景を見せてくれるサイトなど存在する筈がないし、それについて真面目に意見するというのも、馬鹿馬鹿しい気がしたからだ。

「ま、お前もやってみろって。俺ももう登録したからさ。課金もないし、名前を入力するだけだから、簡単っばいぜ？」

「あー、はい、はい。分かった分かった……」

呆れた調子を隠そうともせず、黒髪の少年が言う。

彼がダイチの催促に従ったのは、先に述べたように、元々その『死に顔サイト』とやらの機能を信じていないからというのと、仮に『本物』だったとしても、それはそれで面白そうだという、若干不道德な理由もあったからだ。

いつの間にかサイトのトップ画面には、新たに『新規登録はこちら』というアイコンが表示されていた。

カーソルを合わせ、ボタンを押す。

次に表示されたのは、名前を入力する画面だった。

こういったサイトに関しては、特にニックネーム等を使わない（そこに何かしらの信念がある訳ではないが）黒髪の少年は、素直に自分の本名をそこに入力した。

冬川ふゆかわ威月いつぎ、と。

直後だった。またも、突然携帯の画面が切り替わったかと思うと、次には、

『こんにちはっ！　そして初めまして！　【ニカイア】へようこそ！　ワタクシ、案内役のティコティコ、貴方のティコりんです』

と、かなりハスキーな声と共に、ウサミミカチューシャを頭につけた女性　ティコが、画面内をジャックしたのだ。

「……………っ！！」

問題なのは、ティコの声が中々に大きく、そして、今は模擬試験が終わった直後で、当然、周りにはまだ何人かの生徒が残っている、という事だ。

下手したら、これから自分はかなり冷たい視線を浴びせられながらの学校生活を余儀なくされるかもしれない。

そんな風に、壮絶なまでの危機感を覚えつつ、慌てて辺りを見渡す威月ではあったが、幸いにも、先のティコの声聞いた生徒はいないようだった。

いや、厳密には、間近にいたダイチには流石に聞こえていたらしく、現在、彼は口に手を当てて必死に笑いを堪えていたが。

そんなダイチを見て、やはり、後でちゃんと首を絞めておこう、とさりげに残酷な決断を下しながら、改めて、威月は携帯電話の画面に視線を戻す。

先程までは慌てていたので余り気にならなかったが、改めて見ると、ニカイアの案内役を自称するティコは、相当に派手な外見をしていた。

現時点では上半身しかその姿を伺う事は出来ないが、肩まで伸ばした薄紫色の髪は、一体どんな整髪料を使っているのかと疑いたくなる程に艶があるし、パツチリと開いた両目には、（何故か）キラキラと星が輝いている。胸元や肩周りをこれでもかというぐらいに露出させ、健康的な肌が惜し気もなく晒されていたが、それを見ても全くときめかず、むしろ不信感さえ抱いている自分に対して、威月は我ながら驚いていた。

と、次の瞬間、再び、画面内に変化が訪れた。

ティコがいる位置とは反対側の画面の端から、別の人間の姿が映し出されたのだ。

それは男で、ティコと同じく薄紫色の髪をオールバックにし、黒いスーツに身を纏っているという、如何にも紳士らしい佇まいをしていた。

だからこそ威月は、この男がティコとは違い、実に生真面目で物静かな性格なのだろうと、何となく予測がついた。

おもむろに、その男が口を開く。

『初めまして。同じく、案内役のティコと申します。どうぞお見知りおき下さい』

「お前もかよー！」

我慢出来ず、携帯電話の画面に向かって渾身の突っ込みを入れる威月。

流石に今度ばかりは、周りに残っている何人かの生徒達が僅かに引いていた。

しかし、この時の威月にとっては、2人の案内役の名前が同じだという事が何よりも問題だった。この2人を制作したサイト管理者の顔など、勿論威月は知らないが、いい加減にも程がある。

が、そんな彼の気持ちを察したらしく、ティコ（男）の登場で、画面のやや端の方に追いやられていたティコ（女）は、どーんとティコ（男）を突き飛ばすと、次には威月の方に顔を向ける。

『あ！ 威月っち、もしかして、私達の名前が同じだからってテン

パっちゃってる？ でも大丈夫！ さつきも言った通り、私の方は【ティコりん】って呼んじまえば、ちゃあくと区別できるから！ あ、【】の部分はちゃんと発音してね？ これ大事！ それじゃ！ 試しに言っちゃってみて！ せーの……………何で言わないの？』

言う訳がない。

言える訳がない。

威月が冷めた目でティコリ……………もといティコ（女）を見ていると（というより、『』という文字は、一体どのように発音すれば良いのだろう？）今度はティコ（男）の方が、彼女を押しつけて画面内を占拠した。

見かけによらず、割と積極的な行動をする男である。

『……………通常、ニカイアに登録される際、選べる案内役の数は、1人につき男女どちらかの1人ですが……………。お客様の場合は特別に、我々2人でニカイアの機能の説明、及び、これからお客様の周辺で起こるであろう様々な事象に関して、出来る限りサポートさせていただきます』

「……………?」

ティコ（男）の台詞に対し、威月は疑問に思った。自分だけは特別に案内役が2人で、しかも、これから様々な出来事が自分の周りで起こるって？

いずれにせよ情報が少な過ぎて、威月にはどちらについても、具

体的な解釈を下す事が出来ずにいた。

ただ一つだけ言えるのは、例えこの先何が起ころうとも、正直案内役は1人でいい、という事だ。

名前が同じ上に、こつも両者の間にあるテンションの差が激しいと、こちらとしても、その度に調子を合わせるのが大変だからである。

が、そんな威月の辟易へきえきとした気持ちには気付かず 或いは、気付いている上で無視を決め込みつつ 2人の案内役は、どんどん話を先へと進めていってしまう。

次に画面に現れたのは、ティコ（女）の方だった。先程のティコ（男）と同じく、元々画面内にいる相手を無理矢理押しつけて、である。

しかも、先程の仕返しのもりか、押しのける際の挙動が、もはや体当たりと言っても過言ではないそれにランクアップしていた。意外と根に持つタイプの女なのかもしれない。

そして、ティコ（女）は早速、ニカイアの機能について説明し始める。

『当サイトでは、貴方が【縁えにし】を持つちゃってる友達……。つまり知り合いなだけじゃなくて、この先、深あくい関係になっちゃう可能性のある友達が……。逝っちゃう時？ 死んじやう時？ の様子とか、そんなを、先に貴方に見せちゃうって感じ』

そこまでティコ（女）が説明すると、今度は男の方のティコが、

画面の端にヒョッコリと顔を覗かせて、先のティコ（女）の説明に、補足を付け始めた。

『ちなみに、動画がアップされたら、こちらからご案内致しますので、それまではしばらくお待ち下さい』

言葉と同時に、ティコ（男）とティコ（女）の間に、アップされた死に顔の動画の例らしきものが映し出された。

どこぞの建物の屋内にて、血まみれの男性が指1本動かさないまま倒れている、という画像だ。

モザイクなどによって、かろうじて顔や出血部分の傷などは隠されていたが、それが逆に生々しい印象を醸し出していた。

「いや、別に、アップされないならアップされないで、それに越した事はないと思うけどな……」

思わず、威月はボソツと呟く。

2人の案内役の説明を受けても、未だに、未来の友人の死に顔が見れるなどという、ニカイアのトンデモ機能など信じてはいない威月ではあったが、それでも、出来れば友人が死んでいる光景なんて見たくもなかった。ダイチが間違っただけで片足をドブに突っ込む、等といった動画ならば、むしろ金を払ってでも見たいとは思うが。

『ま！ とりあえず、今回はここまでにしておくれ　んじゃねー！  
威月っち！　ハブ・ア・ナイスた〜』

どうでもいいが　出来れば、『威月っち』という呼び方は勘弁



して欲しい、と、威月が心の中で軽く抗議している内に、ティコ（女）はさっさと画面内から姿を消し、男の方も、そのまま画面の端へと移動し、やがては見えなくなってしまうた。

「……………」

ある意味、先程まで行っていた模擬試験以上の疲労を感じつつ、威月が携帯電話の画面から顔を上げる。

するとそこには、彼が一通りニカイアの機能について理解するのを待っていたらしいダイチの姿があった。

「……………な、スゲーだろ？ チョー怖くない？」

芝居がかったヒソヒソ声で、ダイチが言う。

「……………ん？ あ、ああ、まあ、ある意味な」

具体的には、ティコ（女）のあの筆舌に尽くしがたいハイテンション振りなどが、である。

そのように、未だニカイア・シヨックから抜け切れていない威月が呆然としてみると、次にダイチは、その顔に軽い笑みを浮かべてみせる。

「はは、やっぱし？ 実は、俺も昨日始めてやったんだけどな。ま、動画、楽しみに待ってよ〜ぜ？」

そんなダイチに対して、いや、楽しみにしちゃ駄目だろ、と、心の中で威月は思った。

もっともダイチにしたって、威月と同じようにニカイアの機能など信じていないからこそ、そういう風に言えるのだろう、と威月には分かってはいたが。

と、ここへきてようやく、自分とは違い、威月が余りニカイアに興味を持っていないらしい事を悟ったダイチが、慌てて話題を変えようとする。

「さて、と。……あー、ところでさ、確か、お前も午後の選択科目はないんだろ？ もし暇だったら、これから渋谷に行くから付き合ってくれよ！ 気になる店があるんだわ」

「んー……」

つかの間、威月は思案したが、まあ、どうせ自分も、今まで空いた時間をどのように過ごすべきかを考えていたところだし丁度いいかな、と思い、すぐさま口を開いた。

「……まあ、別にいいよ。どうせ暇だしな。……あ、でも姉ちゃんには、今日は2時頃には帰るって言って出てきたから、心配させないように、1度連絡を入れておかなきゃならないだろうけどな」

「ははっ！ 確かに、あの人って、そういうトコ厳しいもんなん。それじゃ、ホラ、そうと決まれば、さっさと行こうぜ！ 俺のお目当ての品がなくならない内にな！」

今思い出したかのように台詞を付け足した威月に対して、ダイチは笑顔で応じると、軽やかな足取りで教室の出口へと向かって行く。

威月もまた、席を立ち、スポーツバッグを肩から提げる。

そして、姉に連絡を取る為に、片手に持った携帯電話のボタンを押しながらも、ダイチに続いて教室を後にした。

この時、日本中を 否、世界中を巻き込むほどの陰謀の渦が、水面下で動き出している事も知らずに。

Sunday 『死に顔動画』 (前書き)

『人生とは出会いであり、その招待は二度とくり返されることはない』

## Sunday『死に顔動画』

とは言え、である。

予定になかったダイチの買い物誘いに乗ったが故に、念の為、姉に今日の帰りは少し遅くなるかもしれない、という旨の内容の電話をした威月ではあったが、結局のところ、それは杞憂きゆうに終わった。

と言うのも、予め何を買うのか決めていたのか、ダイチの買い物はほんの30分程度で終わり、2人がQ TRONT前にまで来た時には、まだ13時を回るか回らないか、といった時刻だったからだ。

Q TRONT前は、今日も相変わらず人通りが激しい。個人的には静かで人気の少ない場所を好む威月としては、余り長居はしたくない場所だった。

が、そんな威月とは違い、彼のすぐ近くにいるダイチは、欲しい物を無事に買えた事で気分が良いようだ。

「いやいやいや、買ったちゃったね、ずいぶん買ったちゃった」

「……そうだなー、買ったちゃったなー」

威月が言う。

「ははっ！ 何気に恐ろしき、ショウドウ買いの魔力！」

その言葉を裏付けるかのように、この時ダイチが背に負っている黄色いリュックサックは、模擬試験会場で威月と合流した時よりも若干膨れているように見えた。

「いや〜、ところで、見た？ 俺の買ったアバシロのTシャツっ！ ほら、俺ってこの前に車の免許取ったじゃん？ 春休みとか、アし着て遊びに行っちゃうだろうな〜」

ややあつて、ダイチが言う。

しかし彼は、途端に何か不安そうな表情になると、次のように語り始めた。

「……春休みか〜。大学、受かんないとな〜。あ、だけど……」

束の間の沈黙。

「どうした？」

「あ〜いや……、ちょっと思っただけど、もし受かったとしても……。大学に行って……結局、どうすんのかね？ 卒業したら、その先とか……」

「どうする、って……そりゃあ……まあ、普通に就職とかするんじゃないか？」

しかし、そんな威月の返答を予測していたかのように、間髪入れずに、ダイチは、

「就職して、その次は？　ただ金稼ぐだけ？　何か、こつさく、ブワツと不安だね。別にどうする事も出来ないけど」

と言った。

「そう……だな」

一瞬、「いくらなんでも、それは甘ったれ過ぎじゃないのか？」という台詞を吐きかけた威月ではあったが、ダイチが言う事もあながち間違いいではないと判断し、言わないでおいた。

かと言って、先程威月が述べた言葉は、その場で何となく考えた思いつきの意見、という訳でもなかった。少なくとも彼は、大学を卒業したら、最低限、何かしらの職には就きたいと思っていた。

ニートにはなりたくないというのもあったが、何より、これまで女手一つで自分を育ててきてくれた姉の負担を、少しでも減らしてあげたい、という気持ちが、彼にはあったのである。

「……だろ？　でもどうしようもないんだわ。俺ってホラ、ただの高校生だし」

ダイチが言う。

「……んまっ、そんなこと考えても始まらねーか！　よおし、じやあ、もう用事は済んだし、そろそろ帰ろうぜっ！」

言うが早いか、地下鉄の入り口へと向かって歩き始めるダイチ。

未だ、自分の将来について色々と考えていた威月は、少し遅れて

そんなダイチの行動に気付くと、慌てて彼の後を追いかけて行った。

渋谷、はんそうもんせん半蔵門線ホーム。

威月は、現在地下鉄のホームにて、あと数分もすればやってくる電車を、ダイチと雑談をしながら待っていた。

「あゝ、そういえばさ、アレもう出たんだよね？ 今週発売のゲームで……って、ん!？」

そのように、突然言葉を途切らせるダイチ。

彼の視線はある一点を見つめたまま、全く動かないままである。

不審に思った威月が「どうした？」と言い、頭にクエスチョンマークを踊らせながら彼の視線を追っていくと、その先に1人の少女の姿が見えた。

恐らくは、自分達と同じ学校の生徒だろう、と威月は思った。隣にいるダイチと同じ薄紫色の学生服を着ている事からも、それは明らかだ。



肩からは黒いシヨルダーバッグを提げ、片手で携帯電話をいじりながら、少しずつ威月達がいる方向へと近付いてくる。ボブヘアの髪はダイチよりも若干色が薄い茶色で、丈の短い黒いスカートと同じく黒いニーソックスの間から、磨かれた真珠のように白く美しい足の肌が覗いていた。誰にでも好かれそうな、まだ幼なげの残るその顔立ちを見て、威月は、何となくリスやハムスターといった愛玩動物を連想してしまう。

そんな中 特に頼んでもいないのに ダイチが威月に向かって、彼女に関する更に詳しい情報を述べ始めた。

「やっぱそうだ……！ アレ、C組の新田さんだろ？ にったいお新田維緒！  
成績優秀、顔はかわいい、従順で、清純で、ひかえめな、男子の憧れ、絶滅危惧種……！ いいなあ、あーゆーの。憧れるよなあ……」

一体何を想像しているのか、ニヤニヤとした笑みを浮かべながらそう語るダイチを見て、その表情のまま彼女を見たら訴えられる可能性もあるから気をつけるよ、と威月は注意しようとしたが、それはそれで面白そうな展開だと思ったので、寸前でやめておいた。

また、ダイチとは違い、成績優秀だが顔がいいだけ従順だか清纯だかひかえめだか知らないが、そのどれらの要素にも全く興味をそそられなかった威月は、やたら興奮しているダイチに対して、「ふーん」と、実に冷たい反応を示す。

しかし、そんな威月の淡白な返事が、ダイチには気に入らなかつたようだ。

「だー！ もうー！！ 何だよその反応は！！ お前はそれでも、今

を生きる高校男児か!？」

「……………」

勿論、先程ダイチが言ったように、イオが男子生徒達の憧れの的である以上、威月もまた、そんな彼女の噂を何度か耳にした事はあったのが、ここまでの彼の言動から何となく分かるように、特にそういった方面の話には余り興味がない威月は、あの子がそうなのか、と思っただけだった。

その時だった。

「あの……すみません」

いつの間にか、威月達のすぐ近くにまで近付いていたイオが、突然、2人に話し掛けてきたのだ。

「あ、何だよ？俺たち青少年は今、甘い妄想族……って、ウイッ!？」

威月よりも少々遅れてイオに気付いたダイチのリアクションを見て、「ウイッ」て何だよ、と心の中で突っ込みを入れる威月。

一方、イオの方はというと、独特のリアクションをしているダイチを見て、律儀にも申し訳なさそうな表情を浮かべていた。

「あ……ごめんなさい。うちの学校の制服着てたから……」

言いながらも、チラッと威月の方に目を向けるイオ。

それに気付いた威月は「妙だな」と思った。先のイオの台詞とは違い、彼は学校の制服などは着ていないからである（フード付きなのはともかく、そこからウサミミが生えている衣服を制服としている学校が、一体どこにあるというのだ）。

「ニツ……に、に、新田シャン!? ここ、これは奇遇だ……!」

余りにも突然の展開を受けて、若干、口調がロボット気味になるダイチ。

その間にも、何度かイオはチラチラと威月に視線を送っており、当たり前のようにそれに気付いている威月は、自分の顔に何かついているのだろうか？ と、怪訝な表情で小さく首を傾げていた。

だからこそ威月は、

「……どうかした？」

と尋ねたのである。

「あ……うん。えーと、試験の帰りですか？ 私、遅れちゃって……。まだ皆残ってるかなって」

イオが言う。その最中、こんな大事なテストの日に遅れるなんて余裕だな、という意味を込めて（そっいえば、先程ダイチが『成績優秀』だとか言っていたような気がする）、威月はイオの顔に目を向けていたのだが、その際、偶然にも同じタイミングでこちらを見たイオと顔を見合わせるような形になってしまい、途端に、イオは顔を赤くして凄まじい勢いでこちらから目を逸らしてしまった。

思わず、威月は僅かに顔をしかめた。会ってまだ数分も経っていないにも関わらず、顔も合わせたくなるほど嫌われるような事を、果たして自分がしたたろうか、と。

直後　　どういふ訳か　　横にいるダイチに押し倒される威月。

「あゝうんうん、全然大丈夫だよ！ 午後からは選択科目だから、国立のヤツらはまだいるんじゃないかな！」

いつにも増して饒舌じょうまつになっていくダイチの台詞に対し、イオは「そ、そう……」と、床に倒れた威月をチラチラと心配そうに見ながら答えていた。

パンパンと白い服についた汚れを払いながら、威月がため息混じりに立ち上がるのを横目で見つつ「……良かった、ありがとう」と、改めてダイチに礼を言うイオ。

しかし、その顔がまだ何か言いたそうである事に気付いた威月は、最初こそ、まだ何か用があるのかと思っていたが、途端にピンときたので、

「あー……、問題文なら後で貰えるけど」  
と言った。

「え……？ ……凄いね、何で分かったの？」

「いや、別に凄くはないと思うが……」

素直に感心した様子イオを見て、威月は、何となくこそばゆい

気持ちに駆られてしまう。

「そっか……。問題文、学校で言えば貰えるよね。焦っちゃった……」

ややあつて、イオが言う。

「……ありがとう。ごめんね。いきなり声かけちゃったりして。じやあ……」

そう言つて、ペコリと頭を下げてから、地下鉄の出口へと向かつていこうとするイオを見て大きく慌てたのは、やはり、威月の隣にいるダイチである。

「あ、馬鹿バカ、バカ威月っ！ あの、ににに新田ちゃん！？ え」と……」

「……？」

突然、意味不明な言動を取り始めたダイチを見て、イオは純粹に疑問そうな表情を浮かべていた。

威月もまた、何いきなりテンパってんだ、と実に冷めた目つきでダイチを見ている。

「あーいや！ その……」

と、不意に、ここでダイチの台詞が途切れた。

理由は簡単。突然、威月、ダイチ、イオの3人から、全く同じタ

イミングでメールの着信音が鳴り響いたからだ。

「うわ、ビビった！ 一斉に着信とか……は、はは。俺達気が合うな」

勝手に言ってると思いつつ、威月は、高校入学と同時に、姉に買って貰った青い携帯電話を取り出すと（ちなみに色の方は、ダイチの物がイエローで、イオの物はピンクだった）、受信メールが保存されているフォルダを開き、そこに1通の新着メールが届いているのを確認する。

(……………？ これは……………？)

届いたメールの送り主の欄を見て、思わず眉をひそめる威月ではあったが、それを言葉にする必要はなかった。というのも、隣にいるダイチが、

「あ……『ニカイア』？ まさか死に顔動画……」

と、誰にともなく呟いたからだ。

どうやら、彼の携帯にも、現在威月が見ている物と同じ内容のメールが届いたらしい。恐らくは、イオにしても同様だろう。

改めて、そのメールの中身を確認しようとする威月。

見てみると、やはり、先程ダイチが言ったように『死に顔動画』がアップされていた。

何やら不吉な予感を覚えつつ、『アップされた動画を見る』の欄

にカーソルを合わせようとする威月だったが、しかし、その途中でイオが、

「……………？ 何コレ……………気味悪い……………」

と不審そうに呟いた為、思わず彼は、ボタンを押そうとしていた指を止めていた。

「どうかしたのか？」

思わず、そのように尋ねる威月。

しかしその質問に答えたのは、イオではなくダイチだった。

「あ……………威月だ。これってお前じゃね？ うわ〜キモ……………」

「……………」

ガシツ……………！！ と、手を伸ばして、無言で隣にいるダイチの髪の毛を威月は掴む。

「……………なるほど。お前には、俺の顔がそんなに不細工に見えるのか」

「イ、イタタタタ……………！ ち、ちが！ いや、違う！ そうじゃなくて！ お前の顔の作りが悪いとかそんなんじゃないよ！！ 今の『キモい』って言葉にはもっとちゃんとした別の意味があるっていうか痛い痛い痛い！！ ハゲちゃうハゲちゃうこのままじゃハゲちゃうって！！ いやホントマジで痛いからマジやめてホントごめんない申し訳ございません今のは俺の言葉選びが不適切でした……………ツツツ……………」

何やら、先のダイチの台詞を間違った風に解釈したらしい威月が、いつものそれよりも若干ランクが上の制裁をダイチに加える。

「ふ、冬川くん、落ち着いて……！」

慌てたように、イオが言う。

そんな彼女の気持ちを汲んで、威月は「まったく……」と、半泣きモードへと移行したダイチの髪から手を放しつつも、そういえば、どうして新田は自分の名前を知っているのだろう？　と思った。少なくとも、まだここで初めて顔を合わせてから今までの間に、名前を名乗った覚えはないが……？

「え、えっと、とにかく、これ見て……！」

そう言っつて、スツとピンク色の携帯電話を威月に差し出すイオ。

威月は無言でそれを受け取ると、改めて、アップされた動画を見るためにボタンを押した。

それから間もなくして、彼は息を飲む事になる。

そこには、とても軽い気持ちで直視する事は出来そうにない、何とも陰惨いんさんな光景が映し出されていた。

場所は恐らく、現在威月が立っているこの場所、渋谷の半蔵門線ホームだろう。一体何があったのか、脱線したらしい電車がホームにまで乗り上げ、多くの人々を下敷きにし、あちこちに赤い血肉を撒き散らしていた。そして、その倒れている人々の内の1人に、威



月は見覚えがあつた。当たり前だ。それは他ならぬ、彼自身だつたから。

なるほど、先程ダイチがキモイと言っていたのはコレの事だったのか、と威月は得心がいった。確かに、頭から大量の血を流し、虚ろな目で体を横たえた状態で映し出されている、この画面内の自分の姿は（キモいかどうかはともかくとして）、誰であろうと、長く見ていようという気持ちにはとてもなれないだろう。

「「「……………」」」

しばしの間、気まずい沈黙が場を支配する。

その後、最初に口を開いたのはダイチだった。

「良く出来てんなあ…………」。『死に顔動画』とかつて、もっと安っぽいものかと思つてたわ」

そう話す彼の口調から、威月は、ダイチが未だに『死に顔動画』がアップされるという、その『意味』を信じていない事を悟った。

もっとも、それは威月にしても同じ事ではある。

しかし彼は、そんな自分の意に反して、胸の中で、急速な勢いで何かしらの『不安』が広がっていくのを確かに感じていた。

何か、自分にはとても考えの及ばない不吉な出来事が、見えないところで着々と進行しつつあるかのような　そんな予感。

「…………私の中には…………映つてたよ？」

一目で血の気が引いていると分かるぐらいに蒼白になっている顔をダイチに向けながら、イオが言う。

それを聞いたダイチが疑問の表情を浮かべたのを見て、威月はダイチの顔にイオから借りた携帯の画面を向けると、その内のある一点を指で指し示した。

「これを見る」

威月が示す部分を、顔を近付けて確認したダイチは、最初こそ、一体自分は今、何を見ているのだろうという表情を浮かべていたが、やがて、あんぐりと口を開ける。

「……あ、え？　もしかして俺？」

それを聞いたイオと威月は、無言のままに頷く。

「ぐへえ……マジツすか。イタズラにしちゃ手が込んでるなあ……」

弱り切ったようなダイチの声。

やがて、ダイチがそう言うのを見計らっていたかのように、ホームの天井に取り付けられているスピーカーから、間もなく電車が来る旨を伝える、無機質な女性の声が流れた。

電車で通学している威月にとっては、既に聞き飽きたと言ってもいい声ではあったが、しかしこの時だけは、どういう訳か、その機械的で冷たい口調に、何か嫌な予感を感じずにはいらなかった。

その時だった。

ズンツツ!! と、

三人を僅かに宙に浮かばせる程の衝撃が、突然、駅のホーム全体に襲い掛かった。

「……………っ!!」

「なっ……………!?!」

「きゃっ……………!?!」

突然の出来事に対して、三人がそれぞれの反応を見せている内に、やがて、次の変化が訪れる。

先程の衝撃が皮切りであるかのように、今度は小さく、断続的な揺れが起こり始めたのだ。

小さい とは言っても、あくまでもそれは、先程の衝撃に比べれば、という話である。

少なくとも、その場に居合わせた人々に不安を抱かせるには十分過ぎる程の効果が、それにはあった。

「うわ、何だ！？ コレって……地震！？」

ダイチの台詞に言葉を返す者はいない。そんな余裕は、誰にもない。

全員が必死だった。近くの壁や自動販売機に手を当てる事で体を支えようとする者もいるが、それさえも意味がない程に、段々と揺れが強くなり始めていた。

ホームのあちこちに巨大な亀裂が入り始め、天井からは、大小様々な大きさの瓦礫が降り注いできている。

しかも都合の悪い事に、その中でも一際大きなものが、イオの頭目掛けて落下してきていた。それを目撃した威月は、考えるよりも先に行動を開始していた。

半ば体当たり気味にイオの体を押し飛ばし、何とか、彼女を瓦礫の落下点から遠ざけたのである。が、その代わりに、威月の方が件の瓦礫を頭で受ける羽目になってしまった。

辺りで大勢の人間が悲鳴を上げるのを聞きながら、何かドロリしたものが自分の頬を伝っていくのを感じ、今、自分が頭から血を流している事を威月は自覚する。

しかも更に悪い事に、どうやら、その痛みに顔をしかめている時間さえないらしい。どこか離れた場所から電車が迫ってくる音を聞いて、威月はそう思った。

ギヤリギヤリギヤリツツ！！ という耳障りな金属音が、人々の

恐怖を更に煽り立てる。

どう考えても、近付いてくる電車が正常に動作しているとは思えない。次々と悪い方向へ変化していく状況を受けて、辺りは完全にパニック状態になっていた。

やがて、空気が爆発した。ついに、電車が見える位置にまでやってきたのだ。ただし、傍から見てる威月が分かるぐらいに線路を脱線しながら、である。

車両の一部がホームに乗り上げ、地上へと続く階段の一つや広告掲示板などを吹き飛ばした。しかもその中には何人かの間人も混じっており、たちまち、まだ死ぬには早過ぎる人々の体が、ただの肉塊へと変えられていく。

ついに激しい揺れに体を支え切れず、膝をつき、手を地面に置く三人。

しかし、彼等の災難はそこでは終わらない。

不幸というものは、次々と積みかけるようにやって来るのが世の常だ。

それを証明するかのように、三人の視線の先では、やっと停止した電車の車両の一部が、大きく宙に浮き上がっていた。そしてもう間もなく、それは地球の重力に従って、凄まじい威力と共に、三人の頭上へと落下してくるだろう。

威月はそれを、地面に手をついたままぼんやりと見ていた

逃げなければいけないのに。すぐにも逃げなければいけないのに、目の前の現実を受け入れるのを、脳が拒否していたのである。

やがて、電車が傾き始めた。

それが、威月にはまるでスローモーションのように見えた。

これから、自分は死ぬ。

その単純、かつ明快で残酷な事実を威月が認識した瞬間、彼の意識は闇の中へと落ち、目、耳、鼻、舌、肌といった、全ての感覚を手放した。

Sunday 『異界の住人』 (前書き)

『臆病者の恐怖は臆病者を勇敢にする』

## Sunday『異界の住人』

冬川威月は闇の中にいた。

朦朧とした意識の中で、二人の人間の声だけが聞こえてくる。

冬川様。意識はございますか？

やほほ、ティコリんだよ　起きてる？

ねえねえ威月っち、このままだと死んじゃうね？

だけどさ、もし……。

もし、まだ『生きたい』って思うなら、あなたの『悪魔召喚アブリ』が役に立つと思うけどな

さて、如何ですか。それを知っても尚、生きる事を諦めますか？

……。

闇の中で、威月は答える。

答えは、決まっていた。

畏まりました。貴方様の強い『生きる意思』。私達がしかと確認致しました。



そして、

だ〜いじょうぶ！ 『異界』の力を持つ威月っちなら、これぐ  
らいの状況、どうって事ないよ それじゃ、頑張ってる〜

その台詞を耳にするのとほぼ同時に、威月は、自らの意識を完全  
に覚醒させた。

渋谷、半蔵門線ホーム。

そこで意識を取り戻した威月がまず最初に感じたのは、自分の頬  
に当たる冷たい地面と、そして、頭部から流れ出ている生温かい血  
の感触だった。

「……………っ」

遅れて目を開ける。

ダイチとイオの姿は、未だ頭が混乱している威月のすぐ近くにあ  
った。

威月が見る限り、どちらも、意識こそまだ失ったままではいるものの、少なくとも生きてはいる。

それを理解した威月は、思わず安堵したように深く息を吐いてそして気付いた。

自分の正面に、一体の『異形』が佇んでいる事に。

「　　っ!」

すぐさま、跳ねるように起き上がり、慌てて、その怪物から距離をとる威月。

そして改めて、目の前にいる怪物に目を向ける。

身長は威月の二分の一程で、赤紫色のおかっぱの髪で両目を隠しており、全身を赤い光沢のある肌で覆っている事などから、まるでトカゲのような印象があり、耳元まで大きく裂けた口の端からは、それぞれ左右に一本ずつ、白く、鋭い牙が生えている。

しかも、

「……ふはー、人間界なう。電車は流石に重かったよ?」

なんと驚く事に、その怪物は喋っていた。

「ボクの名前は『オバリヨン』。勝手に死なないでよ。チミはボクが殺さない」と

「……………！」

普段から無表情でいる事の方が多し威月の表情が、更に驚愕のそれへと変わる。

『殺さない』 オバリヨンはたった今、確かにそう言った。

そして聞いた側である威月は、それが決して嘘やジョークの類ではない事を即座に理解した。

同時に 威月よりも少し離れた位置に倒れているダイチもまた、ゆっくりと目を覚まし始める。

やがては完全に意識を取り戻し、先ずは周りの光景を見て啞然とし、次には、脱線した電車のすぐ側にいるオバリヨンを見つけると、

「う……………おわああああっ！！ なっ、な……………何だコイツっ！！」

次に目を覚ましたのはイオだった。

「……………っ！ きゃあああっ！！」

言って イオは慌てて、近くにいる威月の背に隠れる。

イオの悲鳴を聞き、まるでそれが嬉しくて堪らないといった様子

でその場で小さく跳ね、次には、威月達に向けて挑発するように手招きをするオバリヨン。

「わお、黄色い悲鳴。でもちよūdいなので、三人まとめてバトルぷりーず」

その言葉を聞くと同時に、一度、その場で大きく体をふらつかせる威月。

(ク……ソツ……！ お姫様ヒロインを守る騎士ナイトを気取るには、状況が悪過ぎるー！)

威月は思う。

状況だけを見れば三対一と、一見威月達の方が有利に見える。

しかし、完全に腰を抜かした様子のダイチとイオを戦力として数えるのは無理な話だろう。

かと言って、話し合いでこの場を納めようというのも無理な話だ。

威月が見る限り、目の前の怪物は何を言っても自分達を殺す事を断念するようには見えないし、何より、この怪物に人間の価値観が理解できるのかと思うと、甚だ疑問である。

では戦うしかないのか、と、一瞬威月は考えるが　しかし、すぐにその考えを否定する。

ここは場の雰囲気に当てられるよりも、冷静に、今自分達が何をすべきか選択する事の方が重要だ、と。

ほんの数秒の時間もかけない内に、威月は決断した。

背後にいるイオの手を掴み、ダイチに向かって、吠えるように指  
示を飛ばす。

「ダイチ！ いつまで腰を抜かしてるんだ！！ とつと逃げろぞ  
！！」

一瞬、ダイチは威月の顔を不思議なものでも見るかのような表情  
で見つめていたが、やがて、

「え……？ あ……！ お、おうっ！」

と言い、急いで立ち上がろうとする。

それを確認した威月は、イオに「こっちだ」と短く告げると、  
その手を引いてホームから地上に出る為の階段へと向かっていった。

しかし残念ながら、その逃走行為は、始まってから数秒もしない  
内に中断せざるを得なくなった。

というのも、三人がホームへと向かおうとしたその途中で、彼等  
の道を塞ぐかのように、新たに二体 オバリヨンとはまた別の怪  
物が、突然目の前に現れたのだ。

「まままマジかよ！ ば、化け物が、前にも後ろにもっ……！！」

ダイチが言う。

現れた怪物の内の一体は、威月の手の平に収まってしまいそうなほど小さく、肩と股が露出した青いタイツを身に纏い、赤い髪を左右に分け、同じく赤い瞳で、興味深そうに威月達を見つめていた。

もう一体の方も、体の大きさだけで言えばピクシーとそう変わらないが、それ以外の部分は何もかもが違っていた。例えるならば、土偶ツクベ。作り物のような青白い体、指のない手足、顔と体が同じ大きさで、目と口がある筈の場所には、ポツカリと黒い穴が空いている。

先に言ってしまうならば　赤い髪の、小型の女性のような姿の怪物が妖精『ピクシー』で、土偶のような青白い体の怪物が、幽鬼『ポルターガイスト』である。

「どっ……しよう。このままじゃ……！」

そう言うイオは、少しでも恐怖を和らげる為か、威月の手を握るだけにとどまらず、今や彼の左腕を、自らの胸の谷間うすに埋めるようにヒシツと抱きしめていた。

そのせいで、彼女の豊満な乳房の柔らかな感触を、左腕に嫌というほど感じる事になる威月ではあったが、状況が状況だけに、全く幸せな気持ちになる事が出来なかった。

プレッシャーのあまり心臓が早鐘を打ち、同時に、頭からの出血のせいで若干視界をぼやける。

それでも威月は何とか、今、生き残る為に自分達がすべき事は何なのかを、冷静に分析しようとする。

その結果が、

「……戦う、しか……ないみたいだな」

「……はあ！？ た、戦う……って、マジかよお前！！」

途端に発せられる、ダイチからの批判の声。

それを聞いて思わず威月は、横目でダイチの顔を睨みつけた。

「じゃあ、他にどうしろっていうんだよ？ それともお前には、コイツらが、話し合いさえすれば俺達を見逃してくれるような連中にも見えるのか？」

そこへ更に、さつさと覚悟を決める、と威月が付け足す。

しかし当然、その間にも、敵は行動を開始していた。

最初に動いたのはポルターガイストだった。その小さな体で、これこそ幽霊のように宙を移動し、真っ先にダイチとの距離を詰めてくる。

「あくもつ、何ゴタゴタ言ってるのさ。いいから早く死んでよ、ほくだって、タボウなんだから」

「……つぎけんな！ こっち来んな！！ 来んなよっ！！」

途端に、ダイチが情けない声を上げた。しかし、かろうじて抵抗の意思を見せているのは口だけで、体の方はと言つと、恐怖の余りに腰を抜かして、咄嗟には動けない様子である。

それを見た威月は思わず、チツ、と小さく舌を鳴らした。

「だから……覚悟を決めろって言っただろっが!!」

気付いた時には、威月はダイチへと接近するポルターガイストの元へと駆け寄っていた。

そしてそのまま、肩から提げていたスポーツバッグを思い切り振り回し、十分に遠心力をつけると同時に、ポルターガイストの小さな体たいくへと、それを思い切りたたき付ける。

効果は十分にあつた。ポルターガイストは「ギャウツ!!」と叫び声を上げると、ホームの上に乗りにまで乗り上げてきた電車の側面に、思い切りその体を衝突させたのだ。

「さ、サンキュー威月!」

そう話すダイチには構わず、新たに行動を開始したのはピクシーである。

どうやら彼女は、ポルターガイストを弾き飛ばした威月こそが、今、ここにいる三人の人間の中では最大の障害だと見なしたらしく、背についた小さな羽をばたつかせながら、一気に彼との間にある距離を詰めていた。

「人間のクセにやるじゃん! でもさ、アタシに勝てる?」

その言葉を聞いて、フン、と思わず威月は鼻を鳴らす。

「別に、何とんでも勝ちたい、とは思っちゃいねえよ」



そう、先程も微かに触れはしたが、何もここで、突然現れた怪物達と無理に交戦する必要は全くないのだ。

今の自分達にとって最も重要なのは『安全を確保すること』であり、それならば、『逃げる』という選択肢もなくはない筈だ、とも。

しかし、相手がそれを許してはくれないというならば、彼としても、多少は抵抗せざるを得ない。

故に威月は、少しでも身を軽くする為にスポーツバッグを地面に放り、僅かに腰を落として、構えた。

無論、ピクシーがどのような攻撃をしてきても、即座に対応する事が出来るように、である。

しかし、次にピクシーが見せた行動は、そんな威月の想像の遙か上をいつていた。

一旦、空中でその体を制止させたかと思うと、次には、その手に青白い光を収束させ始めたのだ。

それを見て、威月は眉をひそめる。

瞬間、ピクシーの手に収束していた光が稲妻へと変わり、威月の元へと向かって行った。

「うおっ!?!」

慌てて、体を横に投げ出す威月。

が、完全に回避する事は叶わず、右足の方にだけ電撃が直撃し、その衝撃によって威月は、不自然な体勢のまま、離れた場所にある自動販売機にまで吹き飛ばされてしまう。

ズガアツツ!! という凄まじい音と共に、背中と、そして後頭部とを激しく強打してしまう威月。

そのせいで、先程から続いていた頭からの出血が、更に激しくなっていた。

「……………!! ……………あ、ああ!?!」

呻き、『ジオ』を受けた右足を、威月は両手で抑える。

「あつ……………! ……だ、大丈夫!?!」

そんなイオの言葉に対して、大丈夫じゃない、と答えようとした威月ではあったが、そんな短い言葉を吐く事さえ、今の彼には煩わしかった。

それでも、何とか体を起き上がらせる威月に向かって、ダイチが叫ぶ。

「気をつける、威月! ……こいつら…………マジで俺達を殺す気だよ!!」

「そうかい! ……そいつは意外だな!!」

今さら気付いたのかよ、というニュアンスを込めて、威月は、ダ

イチの台詞を壮絶なまでに皮肉る。

と、そんな中、威月の視界の端に、とても見過ごす事など出来ない光景が映った。

自分よりも大分離れた場所にて、ポルターガイストが、正面にいるイオに対して、今まさに魔法による攻撃を仕掛けようとしていたのである。

すぐさま、イオの元へと足を動かす威月ではあったが、走りながらも、彼は確信していた。

ダメだ。今すぐサポートに向かうには、距離が開き過ぎている。このままでは間に合わない、と。

だからこそ、威月は叫んだ。

「避けるオオおおおおおっつ！！」

そんな威月の声に弾き飛ばされたかのように、即座にイオが横っ飛びに飛んで、ポルターガイストが発動させた、その魔法『ブフ』を、間一髪のところまで避ける。

『ブフ』の影響を受けた部分の地面が、まるでスケート場の凍っていき、それは威月がいる場所にまで迫っていった。威月もまた、横に移動してそれをかわす。

「新田さん！」

そう叫んだのはダイチである。

ある程度、怪物達に対する恐怖を克服したらしい彼は、それがまるで自分の使命であるかのように、イオの元へと足を動かしてた。

が、そんな彼の行動を途中で阻む者がいた。

ピクシーである。

「う、うわあっ！！」

途端に、声を裏返しつつ、その場で急ブレーキをかけるダイチ。

そんな彼を見て、ピクシーはクスクスと笑う。

「あゝやだやだ。男の子のクセに、そんな情けない声出しちゃって……。アンタなんか、とつとと死んじゃえ！！！」

言つが速いか、ダイチの体目掛けて『ジオ』を発動するピクシー。

紙一重のところをそれを回避するダイチではあったが、その際、ホームから線路へと足を踏み外し、線路の方へとそのまま落下してしまう。

「ダイチっ！！！」

それを見た威月は、思わず心配そうに叫ぶ。

「きゃはははっ！！ ダッさ〜い！！！」

一方ピクシーは、ダイチの後を追う形で、彼が落下した線路の方

へと飛んでいった。

「……っ！ くそっ！！」

毒づき、すぐさま威月もその後を追おうとしたが、そうやって、目先の出来事にはかり拘こたわっているのがいけなかった。

直後。

バガンッ！！と、

凄まじい威力を伴ったオバリヨンの一撃が、僅かに気を逸らした冬川威月の頭部に炸裂したのだ。

「　　っ！！」

叫び声を上げる暇もなかった。

頭部を貫く衝撃に堪えられず、そのまま吹き飛ばされ、ホームの床の上を二度、三度と体をバウンドさせる威月。

「か……はっ……！！」

それでも、威月がまだかろうじて命を繋ぎ止めていられるのは恐

らく、今もなお、彼の顔を深紅に染めている頭部からの流血のせいだろう。

奇しくもそれが潤滑油じゅんかつゆのような役割を果たし、オバリヨンの一撃の威力を軽減させたのだ。

しかし当然、全くの無傷で済んだという訳でもない。

その証拠に、頭部からの出血は更に激しくなり、今や威月の顔も、純白の上着も、殆どが真っ赤に染まっていた。

「う……………!!」

余りに大量の血を流したせいで、頭の中でポーツとした熱が生じ、そのせいで、段々と妙な心地好ささえ覚えてしまう。

(まだ……………まだまだ……………!!！)

それでも、気持ちだけは負けず、何とか立ち上がろうとしただけでも大したものだろう。

しかし、そんな些細な行動をとる事さえ、この時の威月には許されていなかった。

ズシリ、と自分の胸の辺りに何か重い物がのしかかったかのような感触を威月が覚えた時には、もう遅かった。

見れば、先ほど威月を吹き飛ばしたオバリヨンが、いわゆるマウントポジションと呼ばれる体勢で、彼の動きを封じていたのだ。

「なんつ……!?!」

威月の目が驚愕に見開かれる。

「これでチミの逃げ場はなし。これから君は死んで、めでたく、僕はふりーだむ」

次の瞬間にはもう、オバリオンは再び、拳を後ろに振りかぶっていた。

あと数秒もしない内に、それは弾丸の如き威力と速度を伴って、威月の頭部を粉々にしてしまうだろう。

極限の状況。

生きるか、死ぬか 次の自分の行動次第では、その命の行方が決まるという、そんな、瞬きにも満たない程に短い時間内において、威月の体は咄嗟に動いていた。

正確には、彼の左腕。

それが、やや離れた位置にある、横転した電車からはみ出していた、黒い配線を掴み取っていたのだ。

その配線は 恐らくは事故の衝撃によって 途中で引きちぎられており、導線の露出した断面からは、バチバチと行き場を失った電力が弾けていた。

それを威月は、手を伸ばして無我夢中で掴み取ると、そのままオバリオンの頭部に、突き刺すように押し付ける。

極限下の状況によって生み出された、無意識の内の行動。

思いつきだろうと偶然だろうと関係ない。ただ確かなのは、冬川威月という男は、ここまで絶望的な状況に追い込まれて尚、最後まで諦めなかった、という事。

そして、俗に言われる『奇跡』とは、そういった『最後まで諦めない人間』の上にこそ降りてきやすい、という事だ。

直後、大量の電力がオバリヨンの全身を包み込み、そして爆ぜた。それを受け、拳を振りかぶった状態のまま、オバリヨンは絶叫を上げる。

「お……お……っ!？」

そして、決着。

実は、このオバリヨンという悪魔は、電気系統の攻撃に弱い、という特性を持っていたのだ。

勿論、『悪魔』という存在についてまったく事前知識がない威月が、そんな事を理解していた筈もない。

或いはこの時、既に目覚め始め、そして、後に大きく開花する事になる彼の才能が、オバリヨンの弱点を、本能的に理解していたのか。

真実は分からない。



当の本人の冬川威月にしても、である。

それでも、彼は生き残った。それが重要だった。

ややあつて、パタンと、オバリヨンは、力無く威月の胸に上半身を倒れ込ませる。

それを威月は、

「邪魔だ……」

と言つて、鬱陶うっとうしそうに横に放った。

「わ……お……大シヨック。負け……たら……契約、だね。チミ……ボクの……ご主人、様」

完全に弱り切った様子で、オバリヨンが言う。

その言葉を「……？」と疑問に思い、威月がとつさに顔を向けた時には、既に、その小さな体は、淡い光と共に消えていた。

（契約……？）

しかし残念ながら、その疑問を深く追求する暇は全くなかった。

何となれば、突然、離れた場所から、一人の女性の叫び声が、ホム全体に響き渡ったからだ。

弾けるように立ち上がり、咄嗟にその悲鳴が上がったであろう場

所に目を向ける威月。

見れば、悲鳴を上げたその女性　イオが、何かに酷く怯えた様子で、地面に座り込んでいた。

次に、威月が彼女の視線を追うと、そこには、限界まで魔力を溜めたポルターガイストが、今まさに、宙からイオに向かって高威力の魔法を撃ち放とうとしていた。

即座に状況を理解した後、威月は叫ぶ。

「おい……！　何してるんだ！　速く逃げろ！！」

だが　完全に恐怖に体を支配されたイオには、その言葉さえ届いていないようだった。

「畜生っ！！」

忌々しげに舌打ちし、即座に、威月はある決断をする。

直後、まるで体当たりでもするかのように、駆け寄り様に、威月はイオの体を抱きしめた。

突然の威月の行動に「え、ええ！？」と顔を赤くしながら驚くイオをよそに、威月はそのまま、自らの背をポルターガイストに向けて、何とかイオを守ろうとしていた。

が、これから繰り出されるであろうポルターガイストの攻撃を堪えるには、イオの体は余りにも細くて柔らかく、こうして自分が盾になったところで、果たして彼女を守りきる事が出来るのだろうか

？ と威月が疑問に思ってしまった程だった。

「あれね、もう一人きた。まあいいや、このまま一緒に殺しちゃおう」  
その言葉を聞いたイオが威月の腕の中で小さく震え、威月もまた、急速に迫ってくる、圧倒的な『死』の存在を前に、えも知れぬ圧力を感じていた。

とうとう、ポルターガイストが威力を最大にまで高めた『ブフ』を放とうとしたその瞬間、威月は覚悟を決めた。

最早、自分に打つ手はない。万事休すだ。歯を食いしばり、威月はスツと目を閉じた。

しかしこの世界は、そう簡単に彼が死ぬ事を許しはしなかった。

轟音が炸裂した。

一瞬、呼吸を止めかけた威月だったが、すぐに状況を理解した。こうして何かを考える事が出来ている以上、今の音は、自分に魔法が放たれた音の筈がない、と気付いたからだ。

その音は、先程までポルターガイストが浮かんでいた辺りの場所から聞こえてきた。

突然現れた何者かが、横からポルターガイストに強烈な一撃を加え、その体をホームの反対側にまで吹き飛ばした音だったのだ。

「な……？」

余りにも突然過ぎる事態を受けて、思わず、間の抜けた声を出す威月。

彼の目の前では、いつの間にか1人の男が立っていた。

その男の髪は青色だった。その男は黒い衣服を身に纏っていた。その男の左腕には赤い薔薇のような模様の刺青いれずみがあった。その男は猫耳を模したヘッドホンを付けていた。

「……………」

無言で、未だ呆然としている威月の方を振り向く、青髪の男。

その瞳もまた、髪と同じ青色で　そして、左目の方には細い、縦長の傷があった。

しばしの間、互いに視線を交錯させる2人。

そして、

青髪の男は　『アベル』は、こう言った。

「……誰だ、お前？」

「……………」

「こっちの台詞だと、威月は思った。」

Sunday 『激動の余韻』 (前書き)

『青年時代の愚鈍は罪であり、成年になってからのそれは狂愚だ』

## Sunday 『激動の余韻』

助かった。

冬川威月がそれを理解するのに、幾らかの時間が必要だった。

「う……やられちゃった。ズルいよ、他の人間の手を借りるなんてでも……決まりは決まり。仕方ないなあ、仲魔になつてあげるよ」

突如現れた青髪の男の妨害を受けて、瀕死の重症を負ったポルターガイストは、そう言い残すと、先のオバリヨンと同じように、その身を青白い光の粒子に変えて、消失した。

一瞬だけそちらを一瞥し、威月の顔に視線を向けると、青髪の男は口を開く。

「無事か？」

「な、何とか……」

顔にこびりついた自らの血痕を服の袖で拭いながら、威月は答えた。

「そうかい。そりゃ良かった。……俺は『アベル』ってモンだよ。ろしくな、えーと……」

「あ……冬川です。冬川威月」

自己紹介に応じながらも、『アベル』という、およそ日本人とは思えない青髪の男の名前に少なからず疑問を抱く威月ではあったが、すぐに、今はそれどころではないと思い直し、隣にいるイオに顔を向ける。

「立てるか？」

言いながら、威月は手を差し出した。

それに対してイオは、一瞬、驚いたような表情を見せ、次には若干頬を紅く染めて俯きつつも、結局は、威月が差し出した手を嬉しそうに握った。

「う、うん……。ありがとう……」

彼女の手を握り、ゆっくりと威月は立ち上がる。

途中、先程の戦闘であまりにも血を流し過ぎたせいで小さくフラついてしまいが、そこは何とか根性で堪えた。

「う、イテテテ……」

そんな声が威月とイオの耳に届いたのは、2人が揃って立ち上がったのとほぼ同時だった。

2人が声のした方向に視線を向けると、そこには、服についた汚れを片手で払いつつ、線路の方から歩いてくるダイチの姿があった。

「ダイチ……！」



親友が無事なのを見て、威月は安心したようにホッと息をつくが、すぐに、そういえばダイチは、あのピクシーとかいう怪物と戦っていた筈だが、そちらの方はどうなったのだろうか？ と疑問に思った。（まさか……倒したのか？ いや、ダイチに限ってそれは少し考えにくいな……。実力云々の話じゃなくて、性格的に）

そのように、若干失礼な思考を働かせていた威月ではあったが、すぐに、大方、目の前にいる青髪の男 アベルが、自分やイオにしたのと同じように、ダイチの方にも手助けに入ったのだろう、と予想した。

となると、ピクシーもまた、これまでのオバリヨンやポルターガイストと同じように、光の粒子となって消えたのだろう、とも。

それを証明するかのようには、ダイチは、ひとたびアベルの姿を認めると、

「あ、アンタは……！ え、ええと、さ、さつきは助けてくれてありがとうございまして！」

と言いながら、ピシッ！ とキッチリ腰から45度の角度で頭を下げた。

「大丈夫なのか？」

威月が言う。

「はは……な、何とかな……。新田さんは？」

「わ、私も大丈夫……」

まだ先程までの出来事によるショックが抜けきっていないのか、イオの声はかなり小さめだった。

とりあえず2人の無事を確認した威月は、次にはアベルに目を向けた。色々と聞きたい事があったのだ。

「……酷えな」

だが、そう呟かれたアベルの口調があまりにも苦々しげなそれだったので、威月は思わず、開きかけていた口を閉じた。次にはアベルと同じように辺りに視線を走らせ、絶句する。

そこには最早、普段、自分が見慣れていた地下鉄のホームの光景はなかった。これ以上ない程に大破した電車に、崩れた天井。辺りには大量の瓦礫と死体が散乱しており、中には内臓を露出させている者もいる。そこから発せられる悪臭と、辺りに充満する黒煙を受けて、威月は思わず顔をしかめた。

「……クソったれ」

忌ま忌ましげに、威月は呟く。

「あ……」

隣にいるイオもまた、咄嗟には声が出ない様子だった。

「あ……な、何だよ、コレ……。『死に顔動画』を見て……。そんな、デカい地震があつて……!」

そう話すダイチは、余りにも衝撃的な出来事のせいで、口の動かし方を一時的に忘れてしまったかのようにだった。

「そ、それから……あの……ばば、化け物が出て……。ああ、クソッ……！」

「落ち着け!!」

いよいよ本格的なパニックに陥りそうなダイチを見て、威月は思わず声を荒げる。

「おっ、落ち着けないよっ！ お前だつて見ただろ！？ あの『死に顔動画』……！ ど、動画で見た通りに、ひひ、人がこんな……し、死んでんだぞっ！？ 絶対おかしい……。こんなおかしいよ！ 何が起こってんだよ！」

「だから！ それを理解した上でとにかく落ち着けつて言ってんだ！ パニックを起こして冷静さを失ったら、本当に終わりだぞ！」

そんな威月の言葉に萎縮したかのように、ビクツと体を震わせるダイチ。

その後には、僅かに気まずい沈黙が流れた。

しかし、どこからか聞こえてきたパチパチという音によって、不意にその静寂は破られる事になる。

威月、ダイチ、イオの3人が反射的にそちらに目を向けると、そこには、何か感心したような面持ちで、軽く拍手をしているアベル

の姿があった。

「いい判断だ」

威月の顔を見つめながら、アベルが言う。

「どうやらお前が、3人の中で一番落ち着いてるみたいだな。長生きするぜ？ 俺とは違って、そうやって感情よりも理性を優先させる、お前みたいなのはよ。……それがいいか悪いかは分からないけどな」

「……ありがとうございます」

とりあえずはそのように返しておくものの、どういう訳か、威月は素直には喜べなかった。

と、ここで、昂<sup>たか</sup>ぶっていた気持ちが落ち着いてきたのと同時に、威月はある事に気付いた。アベルの右腕に掘られた赤い薔薇の様な刺青に、見覚えがあったのだ。

故に、それについてアベルに尋ねようとする威月だったが、同時に、隣にいるイオがそんな彼の服の裾を軽く引っ張ってきたのを受けて、その行為は中断させられる事になる。

「……………」

眉をひそめつつ、イオの方に顔を向ける威月。

見れば、彼女は今にも泣きだしそうな顔をしていた。

「……ごめん、怖い。とりあえず……」  
「……出ようっ。」

「……だな」

イオの顔が余りにも悲痛と苦痛に満ちたそれであるのを見て、威月は彼女の為にも、まずは場所を移す事を優先させる事にした。

「お……おう！ 早く地上に上がんなきゃ！」

ダイチの声を聞きつつ、「貴方はどうするんですか？」とアベルに尋ねようとした威月だったが、いつの間にか、アベルは既にホルムの階段を上り始めていた。

「どうした？ 置いてくぞ」

首だけを威月達の方に向けながら、アベルが言う。

「……」

つかの間、3人は呆れたように顔を見合わせていたが、やがては、それぞれのバッグを拾い、サッサと階段を上っていくアベルの後を慌てて追っていった。

渋谷、Q TRON T前。

地下のホームから地上に戻ってきた威月達は、再び絶句した。

一体、今日はあと何回驚けばいいのだろうか？ 反射的にそう思っ  
てしまう程の光景が、彼等の目前に広がっていたのだ。

少し前までは何の異常もなかった筈の建物の多くが崩れ、傾き、  
中には火の手が上がっている所もある。大破した、あるいは乗り捨  
てられた車の数々。地盤が大きく裂け、殆どの人が足の踏み場にさ  
え困っているようだった。

言うまでもなく、駅前には多くの人が集まっており、崩れた建物  
に取り付けられた超大型テレビの数々から、緊急で流されている二  
ユースに、ほぼ全員が耳を傾けていた。

「参ったな……。人が多いのは苦手だ……」

「同感です」

ウンザリした様子のアベルの言葉に対し、威月は心底同意する。  
その隣では、ダイチが乾いた笑みを浮かべていた。

「は……はは……ありえねえ。街が……全部壊れちまってる。地震  
……なのか、コレ……」

「……………」

ダイチの言葉を聞きつつ、スポーツバッグから自分の携帯電話を

取り出し、急いで姉と連絡を取ろうとする威月だったが、画面に表示された『圏外』という文字を見て、すぐにそれが叶わない事を知った。

「クソ……ダメだ。携帯も圏外になってるし、ワンセグも映らない」  
「ウソ……」

威月の言葉を聞いて、絶望的な表情を浮かべるイオ。

彼女とダイチもまた、慌てて携帯を取り出すが、その後にそれが見せた表情を見る限り、どうやら、2人の携帯電話も同じ状態にあるらしい、と威月には予想がついた。

しかし、次の瞬間には、ダイチが怪訝な表情を浮かべる。

「……ん？ 何だ、コレ……」

「どうした？」

「変なアプリが入ってる……。『悪魔召喚アプリ』……って、何だコレ！？ 削除できねえぞ、このアプリ……。一体、何がどうなってんだよ！？」

『悪魔』。

その言葉を聞いて、不意に威月の中で、先ほど地下鉄のホームで見た怪物達の姿と、『悪魔』という言葉とが、1本の線で繋がった。

次いで、猛烈に嫌な予感がしたので、慌てて自分の携帯のフォル

ダを開くと、案の定そこには、恐らくはダイチが言ったのと同じものである。『悪魔召喚アプリ』がインストールされていた。

全くもって面白くなさそうに舌打ちする威月の隣で、ダイチは未だに混乱の極みに陥っている。

「……クソツ！ 何なんだよ！ 悪魔とかありえねえし！ 大体、アレ何だよ！ 地下鉄にいた化け物とか！ あんなモンがマジに」

「あつ！！！」

と、

ダイチの言葉を遮るかのように、その声を上げたのはアベルだった。半ば反射的に3人が彼の顔に目を向けると、アベルは、どこか慌てた様子で、

「スマン！ 急に用事を思い出した！ お前らの無事を祈ってるぜ！ じゃなっ！」

と言つて 言うが早いか、あつという間にその場から走り去ってしまった。

後には、ポカンとした表情で佇む威月達に取り残される。

「……な、何だったんだ？ 一体……」

そのダイチの眩きが、この時の3人の心境を代弁していた。



しかし、いつまでも3人だけにいる時間は続かなかつた。と言うのも、不意にコツ、コツ、という足音が聞こえ、1人の女性が近付いてきたからだ。

「……君たち、少しいいか？」

「はい？」

見覚えのない女性の問い掛けに、当然の反応を返す威月。同時に彼は、女性の容姿をサツと確認した。

研ぎ澄まされた刃の様な鋭さを持つ青い瞳に、同じく、後ろで束ねた青い髪。何らかの制服だと思われる黒い衣服に、黄色いミニのスカート。その下からは黒いニーソが覗き、膝に届くほどに長い、白いブーツを履いていた。全体的にボディラインが浮き上がっている、キツチリとした服装なので、それを見た威月は 場違いながらも スクール水着のような印象を受けてしまう。

「地下鉄から上がってきたな？ ……何を見た？」

「へ……？ 何を見たって、そりゃ……。で、電車が事故ってて……」

たどたどしく答えるダイチの台詞を、青髪の女性は手で制する。

「それは承知している。だが……他にも何か見たんじゃないか？」

「……！？ ほ、他にもって……。そ、それは……え〜と……」

明らかに歯切れが悪い口調で何か言おうとするダイチの傍らで、

威月は思わず寒気のようなものを覚えた。青髪の女性の口調から、彼女がこちらの事情を全て見通しているかのような印象を受けたのだ。イオもまた同じらしく、思わず、2人は顔を見合わせる。

「……………」

青髪の女性は、しばらくそんな3人の様子を黙って見ていたが、やがて口を開いた。

「……………では質問を変えよう。先程までここにいた青髪の男と、君達は知り合いなのか？」

「は？」

質問の意図が分からず、威月は思わず素っ頓狂な声を上げる。

そんな彼の耳元で、イオが、やや切羽詰まった声で呟いた。

（あ、あの……。何か変だよ、この人……。あんまり関わらない方が……………）

（……………同感だ）

「どうした？ まさかとは思って……………」

ここで、本能的に何らかの危機を察知したダイチが、それまでの話の流れを断ち切るように言い放った。

「あ……………あゝそうだ！ 俺達、これから行くところあるんで、し、失礼します！」

威月とイオもまた、そんなダイチの咄嗟の機転に上手く便乗し、青髪の女性の視線を振り払うかのように、離れた場所への移動を開始した。

渋谷901前。

青髪の女性の姿が完全に見えなくなったと確信できるその場所まで来たところで、3人はようやく足を止めた。

先程のQ TRONT前よりも大分人は少ないが、それでも、突如の災害を受けて、途方に暮れた様子の人間の姿があちこちに見られる。

「ふい〜……。何だよあの人。超コエ〜って……」

言いながら、一際大きな瓦礫の上に、どっかりと腰を下ろすダイチ。

「うん、本当だよね……。どういう人なんだろ……」

怯えた表情を見せるイオの隣では、威月が、バッグから取り出し

た自前の白いタオルを、ようやく出血が緩やかになってきた頭に巻いていた。

「……さあな。まあ、あんまり関わり合いにならない方がいいのは確かだろうが……」

「そう……だね。よく分からないけど、何か怖いし……」

「つーか、あの猫耳ヘッドホンの人にしても、一体何だったんだ！？ 助けてくれたし、悪い人じゃなさそうだけど……。あ、あの化け物たちとか、普通に倒してたし！」

そう話すダイチに対し、威月はウンザリしたように溜め息をついた。

「……俺が知るかよ。あの目についた傷とかを見る限り、少なくとも、カタギの人間である可能性は低いと思うけどな……」

やがて、しばしの沈黙が流れる。

それを最初に破ったのはダイチだった。

「……でもさ、逃げてきたはいいけど、俺達これからどうすんの？」

「……私、家に帰らないと。お母さん達が心配だし」

イオが言う。

「あ……だよ。俺達もやっぱり家心配だし……。あ、あのさ！何かスゲー今更だけど、俺、A組の志島大地。あとコイツが、俺と

同じクラスの……」

ダイチがそこまで言ったところで、それを遮るように、威月が口を開いた。

「……って、言わなくても分かるよな？」

地下鉄のホームでも、さりげに『冬川くん』って呼んでたし、と心の中で台詞を言い終える威月。

が、そんな事は勿論、ダイチには分かる筈もない。

「いや、知らないでしょ。何言ってるんだお前」

「あの……冬川威月くんだよ。知ってたよ。学校で見た事あるから……」

「ホラ見ろ、知ってるに決まって……って、え？」

マジデスカ？ とばかりにイオの顔と威月の顔とを交互に見つめるダイチ。

「あ、えっと……」

「……」

「……」

何故か、途端に気まずい沈黙が流れたので、はて、俺は何かマズイ事でも言ったたろうか？ と威月は首を傾げる。

しばらくして、ダイチが再び口を開いた。

「あゝまあ、良しとしよう。さて、次の話題、つと……」

どういう訳か、この時のダイチは、道端に捨てられた子犬のような表情を浮かべていた。

「で……俺達は家、近所だからいいけど。新田さんちってどこ？」

「あ、私は有明。ちょっと遠いけど……」

「有明か……」

確かに遠いな、と威月は思った。

それでも、

「……一応、送っていった方がいいだろうな。さつきも、あんな事があつたばかりだし」

途端に、イオは申し訳なさそうな表情になる。

「え……あの……いいよ、遠いし。2人だつて家族とか心配でしょ？」

「……いや、確かに、威月の言う通りにした方がいいかも。ホラ、女の子だけじゃ何かと危ないし……」

そう言ったのはダイチだ。

「ああ……それに、俺は家族って言っても、姉ちゃんが1人だけだしな。その姉ちゃんにしても、殺しても死なないような人間だから、まず大丈夫だろ」

「ど、どういう人なの？ それ……」

冷や汗を流すイオに対して、気にすんな、とばかりに威月は手をヒラヒラさせる。

「う、うん……。えっと、じゃあ、お願いしても、いい……？」

「だから、最初からそう言ってるだろうに……。まあ、任せとけ」

その言葉を聞いて、花が咲いたような笑顔を浮かべるイオ。それを見た威月は、そんなに喜ぶような事を言っただろうか？ と疑問に思った。

同時に、ダイチがパンツ！ と両手を叩く。

「よし！ じゃあ出発だぜ。有明だったら……電車かバス？ 動いてんのかな？ こんな時に……」

「動いてたら動いてたで、ほぼ間違いなく満員だと思っけどな。しかも、毎朝の通勤ラッシュが可愛く思えるほどの」

威月の台詞を受けて、ダイチは心底嫌そうに顔をしかめた。

「うげ……だ、だよなあ……？」

「うん……どうだろう？ もしダメだったら、公園とか、避難所と  
かに行った方がいいかも……」

「あくなるほどね。じゃ……駅とか避難所とか？ そちら辺に行っ  
てみますか！」

言っで、ダイチは瓦礫から腰を上げると、意気揚々と、先程まで  
いたQ TRON T前を目指して足を進めた。

そんな彼の後を、威月、イオの2人が続く。

その際、左肩の後ろ辺りに鈍い痛みが走ったような気がして、威  
月は思わず顔をしかめた。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3275w/>

---

DEVIL SURVIVOR2-GRAND CROSS-

2011年11月27日06時03分発行